

宗教はなぜ必要なのか

花園大学教授 佐々木 閑

宜しくお願います。私は今まで、この「宗教はなぜ必要なのか」というタイトルで話をしたことはございません。依頼を受けまして何気なくお引き受けしたのですが、あとで大変なタイトルではないのかと思ひ、だんだんと途方に暮れました。ですから、今日のお話というのが上手くいくか分かりませんが頑張ってお話を致します。

ユヴァル・ノア・ハラリ氏『サピエンス全史』による宗教概説

お配りした資料の最初が「宗教は」というタイトルになっています。「仏教は」ではなく「宗教は」ですから、粹を宗教まで広げないと話になりません。宗教とは一体どういう意味でこの世に現れてきたものなのか、そしてなぜ人間にしかないのかということについて、私が今まで見た中で一番論理的に明解に書いた本として、最近出ましたユヴァル・ノア・ハラリ著『サピエンス全史』というものがございます。その内容からご紹介をしようと思ひます。ただしここで言いたいのは、ハラリさんの説を出して、「こうなのです」と言った話で終わるつもりは全く無く、むしろ逆でありまして、ハラリさんの説明は素晴らしいのだけれども、全然心を打たないでしょという話をしようと思ひています。では心を打つ話があるのですかと言うことで、別の話をして、比較検討していただく

と思っております。このハリリさんはユダヤ人なのですが、面白いことに仏教修行の経験者でもあるのです。おそらくテラーワダ（上座説部）だと思っておりますが、その修行経験者なのです。今からお話をする中に仏教も当然出てまいります。その仏教の理解が極めて深いのです。驚くほど正攻法で突いているというか、真つ正面で仏教の本質をつかんでいるところがあります。先日、私と対談をしました宮崎哲弥さんという仏教にとっても詳しい方がおられますが、二人してこのハリリさんの仏教理解には目を丸くして驚いたところでもあります。この世に宗教が現れてくる事に関して、このハリリさんの説をまずご紹介いたしますが、おそらく二、三十分かかると思います。

ハリリさんは、宗教というものを「人類を統一する要素の一つだ」と述べています。つまり、バラバラなところで現れ、それぞれが個別に小さなコミュニティを作って暮らしていたホモサピエンスが、世界的に大きく繋がる事になった三つのかすがいのようなものがあると。それは何かと言えば、一つは貨幣の発明である。お金の発明によつて遠く離れた人との間に生産物の交換ができるようになり、こうして人類は繋がっていくのだと。もう一つは帝国である。自分の領域をさらに広げ、他者の領域を自分の配下に置くという帝国思想というものです。国を広げて威張りたいと言うものですが、この帝国思想というものが現れることによつて人類は大きく繋がっていったのだと。そして三番目が宗教であるというわけです。宗教は人類をつなげる要素なんですね。

次に宗教の定義を挙げておきました。宗教とは何かという問いに対するハリリさんの答えであります。「超人間的な秩序の信奉に基づく人間の規範と価値観の制度である」とあります。「超人間的」というのは、人間が互いに相談し合つて決めたことに基づくのではなく、我々には我々が決める以前から、原理的に決まっているかのような何か一つの方針というものがこの世に存在していて、それを私たちは信じ守つて、それに沿つて生きていくという、そういう生き方を我々に与えるものが宗教であると。これは、キリスト教やイスラム教の場合なら唯一神のことで

すね。彼らが言うのは、この世を創造した神という絶対者がいて、その者に自分の人生を信奉して預けていく、そしてその神との契約の中で生きていくというものです。ハリリさんの説は、そういった絶対者を含め、絶対者の存在を含まないものも含めて、宗教というものの全般的定義を言っておられます。そうしますと、この中には絶対者を認めない仏教が入ってくるわけです。お釈迦様の教えは、法則性によつてこの世は動いていくというのが基本原理です。そしてその法則性の中で我々は苦しみながら生きています。その苦しみを消すためには煩惱を自分たちで断ち切るしかないと言っています。これが超人間的な秩序の信奉であります。それに基づいてこの世に生きねばならないという生き方を私たちは与えられている。ですから、この宗教の定義の中に仏教は確実に入るわけです。面白いことに、この中に科学は入らないのですね。なぜならば、サイエンス信仰はもちろん超人間的な秩序の信奉であり、科学の法則性を信じることですが、科学がいくら進展しても、その科学の法則性が我々の生き方の規範と価値観の制度にはならないからです。相対性理論が正しくても、相対性理論に沿って生きていきたいと思いますという考え方にはならないわけです。そういう意味で、科学は宗教に入らないという線引きができると考えられます。これは優れた洞察であると思えます。

次は宗教の成り立ちです。まず、古代宗教というのは局地的で排他的であるといえます。そこら辺の小さな集落の中で、その人達だけがコミュニティを作るために宗教があるわけです。排他的なので、その宗教の範囲に入ろうとした人は排除されることとなります。先日、インドのある島へ渡ろうとした宣教師がそこで暮らす村人たちに殺されましたが、そういった例があります。普遍的で布教を行う宗教が登場したのは、実は非常に新しいわけです。今から二千年前から三千年前くらいの間に新たに普遍的で布教を行うというタイプの宗教が現れてきました。理由は、一つには農耕への生産活動の転換と言われております。最初は農耕における多神教から始つただろうとありま

す。農耕以前は狩猟採取生活ですから、人々がバラバラと自然の中で獲物を捕りながら移動しているのですから、自然と人間の間に特別なハードル、差は無いわけです。こちらが上手くいけば相手を捕まえて食べることができですが、場合によっては我々の方が猛獣に捕まえて食べられることもあるわけです。このような世界の中では、人間が優れていて人間の支配下に自然があるなどという考えは全然起こらないわけです。我々はトラやライオンと同じかあるいはそれよりも下のレベルで細々と生きているという考え方です。これが農耕生活になると大きく変わってきます。農耕というものは、自分の領域の中の動植物を自分の手で育てて生産物を取って食べていくわけですから、動植物は自分たちのコントロール下に入るわけです。つまり、自分たちの思うように動植物を増やし、支配し、そこから生きる糧を得るというものですから、採取狩猟生活に比べてはるかに自然を見下した形になっていくわけです。そこで新しい宗教がなぜ起こってくるかと申しますと、その見下しているはずの自然が、自分達の思うようにならないことがよくあると言うことです。例えば、天候不良とか洪水です。予定通りであれば十分な物が入るはずなのに手に入らないことがある。支配下に入ったと思っていた動植物がその支配から抜けることがあるのです。それを何とか支配しなければならぬという時に何を頼るのか。自然を上手くコントロールしてくれる神という存在をそこにもつてくるのです。いわゆる豊穡の神の発生であります。豊穡の神がいるということは、豊穡でない年があるから豊穡の神に祈るのでありますね。神頼みと言うことです。ここに神が登場する理由がありますね。言われてみればそうですね。ほんとにそうですね。そうかなという気もしますが、理屈は非常に通っていると思います。この場合、神とは実利の神様であります。恵みを与えてくれる神であります。小麦であれば、小麦を育ててくれるはたらきをする神様です。またその神様と別の所に羊を増やしてくれる神様もいる。このようにそれぞれに役割分担が決まっていますので、雨が降らないときに祈るのは雨を降らしてくれる神様、洪

水の時に頼むのは雨を打ち払ってくれる太陽の神と言うように、それぞれ頼む自然現象が違っていて、それに応じた神様が出てきます。このように宗教は多神教として出発するということになります。そこには一神教が出てくる余地はないのです。したがって、各地の農耕を中心とした地域の宗教はすべて多神教から生じています。ところが、この多神教の中に絶対的な唯一の神を認める宗教が出てくるのです。例えばインドがそうでありました。インドは様々な神様、何々天というような神様がたくさんいますが、その中にこの全宇宙を作り出した最初の神というのを設定するのです。例えばヒラニヤ・ガルバとかプラジャーパティです。絶対的に世界をパッと生み出した神がいて、そこから現れてきた二次的なそれぞれの仕事や役割を持った多神教の神という構造がやがて現れてくるのです。ただ、この一番大本の神には仕事が無いのですね。他の多神が仕事をするので。一番上の神はどのような役割かと言うと、世界を見ているだけだと言うのです。この神の特徴は働かない神です。はたらくは全て下の他の神々がするのです。これが多神教が進化した姿ということです。日本で言いますと、八百万の神がいてその奥に一応はアマテラスがいるわけですが、仕事をしているのはそれぞれの神様ということです。役割分担をしているその神様にはファンがいますが、そういった宗教が続いた中で、希な例でありますけれども、ある特定の神様を大好きなグループがその神様を次第に上で見ている何もしない神と同一視するようなことが起こるといえます。ユダヤ教がこれです。ユダヤ教の神というのは、特定の仕事だけしてくれませう。それはイスラエルに住むユダヤ人という民族に富を与えてくれるというはたらきで、ユダヤ人のファンがたくさんいました。そのファンが神様を崇めていくうちに、何もしないはずの絶対神と同一視するわけです。そうしますとそこで現れた神様は、世界を統括する唯一神でありながら特定の人にえこひいきをする神様ということになります。特定の仕事をして特定の人に利益を与えるという役目と、宇宙の絶対神という神がくつついたものですから、特定の人たちに良いことをしてくれる宇宙全

体の神という奇妙なことが起こってくるわけです。これがユダヤ教ですね。ユダヤ教が世界に広がらないのは、その神様がやってくれることは、ユダヤ民族の利益という限定があるからです。当然ながらユダヤ民族以外の人たちにその神を信仰する気持ちは起こってこないわけです。ユダヤ民族の中に限定される閉鎖的な神ということになります。ところがそこに、革命的な事が起こります。それがキリスト教です。イエスが現れ、ハリリさんはイエスとは言っておりませんで後継者のパウロだと言っていますが、その神がしてくれるのはユダヤ民族という限定されたものだけに対して恩恵を与えるのではない、その神は全人類に対して恩恵を与えたいと思っている神なのだ、こう言ったのです。これによって特定の人に利益を与える絶対神であったものが、全人類に対して恩恵を与える絶対神という、新しいスタイルへと広がっていったということなのです。これは何か素晴らしい神が生まれたように思えますけれども、実はあんまり素晴らしくないのです。まず多神教世界は暴力性が薄いと云えます。何故かと申しますと、たくさんの神々がそれぞれに役割分担しているのです、ある神を信じている人と別の神を信じている人との間では妥協が成り立つわけです。ある神は一つの宇宙全体の一部分のことを司っている、一部分のことに関わっているのですから、この神様はこの部分というように、異なる神様のファンの間で調整がしやすく、喧嘩にならないのです。ところが、全ての人類の上に恩恵を与える唯一神というものを信仰することになりますと、その信仰している人たちに与えられる神様の言葉とは、世界で唯一無二の言葉ということになります。それ以外のものが入ってくる余地を認めない言葉ということなのです。その唯一絶対の神から降りてくる言葉ではない言葉を、神の言葉であるという人が出てきた場合、その人に対してそれは間違っていると云わねばなりません。こうして唯一の神の言葉からは極めて大きな排他性が出てきますから、暴力的な一神教世界が生まれるのです。このようにハリリさんは述べているのです。この本がアメリカやヨーロッパで数百万部も売れたと言うのですから、いさ

さか驚きですが、これをなるほどと思う西欧人、キリスト教世界の人がいるということですね。

今の話は多神教から唯一絶対神への流れですが、もう一つの流れとして、多神教の中から二元論的宗教も生まれてきたということです。その代表がゾロアスター教とマニ教です。どちらも今の世界では勢力が衰えておりまして私たちの目には触れにくいのですが、イスラム教がこの世に現れる前の西アジア世界はゾロアスター、マニ教の世界でありました。マニ教はもう少しでローマ帝国を席卷するというほどでした。もし歴史が変わっていたら、今の世界は二元論的宗教のほうが大勢ということもありうるわけです。二元論的世界とは何かと申しますと、多神教が一神に集束するのではなく、二神に集束するのです。善と悪の神があり、その戦いの場がこの世界であるとしません。我々は善の神に味方することにより、その善の神から安心・平和・調和・幸せが与えられると考えるのです。なぜ二神教・二元論に集束するのか、それは二元論によって解決できる問題があるからです。どうしてこの世には悪人がいるのかという問題です。これは一神教では解決できない問題です。この世を一人の神様が創ったとするならば、なぜこの世には神様に背く悪人がいたり、あるいは人と人が争ったり、人が不幸になったりするのか。例えば、人が不幸になって悲しむならば、一神教であれば神が不幸にしたのだからとか、試練を与えて神への信仰を試すためであるとか、いろいろ理由を言いますがそれらは屁理屈に過ぎないのであって、二元論的な宗教ではありませんでした、これらは簡単に解決がつかうわけです。世の中には良い神と悪い神がいて、悪い神が我々を不幸にしようとしているのだから、良い神に味方して悪いことが起こらないようにしようと考えてわけです。このように二元論的宗教は非常に理屈が通っているのですが、歴史の様々な流れがあり、今ではほぼ消滅しました。ただ要素は今も残っていますね。何かというと天国と地獄です。またキリスト教の中でサタンという悪魔がありますが、神様が創ったかどうかわかりませんが、キリスト教とは矛盾するような二元論的な要素が今も残っているということです。

さて、今お話したような宗教とはまた別の流れのものとして、神に祈ることよりもむしろこの世はどのような法則でできているのかということを観察し、その法則に沿って農耕の繁栄を祈るもの。つまり法則を知恵や知識で理解することが最終的には農耕の繁栄に繋がると考えた人たちがいたのです。絶対的な神を念頭に置くのではなく、この世の法則性というものをまず考えて、それに沿うことが規範となる。だから神がいなくても宗教になるのですね。キリスト教のような religion には当たらない形の宗教です。その代表が仏教です。仏教以外には、ジャイナ教、道教、儒教、ギリシャ哲学のストア主義・ストア派ですね。こういった知的な法則性の理解によって我々の繁栄を求める別の宗教も同じ時期に出てきたと言われるのです。ここでハリリさんは仏教の教えを紹介するのです。読みながら紹介致しましょう。

人生は意味の無い愚かで激しい生存競争である。どうすればそこから抜け出せるのか、苦しみは本人の心の振る舞いから生じる。心は何を経験しようが渴愛を生む。渴愛は常に不満を伴う。不快感は快感を求める渴愛を生む。つまり、「嫌だな」と思えば「それを取り除いてよりよいものを手にいれたい」と思う渴愛を生み、快感が得られればそれが消えやしないかと恐れたり、それをいつそう増幅したいというさらなる渴愛を生む。ここが問題ですね。キリスト教やイスラム教は神様から利得をもらいたいと思いますので、その目的は渴愛の充足です。欲望が満たされることを最終的な目標とします。ところが、仏教の考え方は、渴愛が満たされることは無いという前提に立っておりまして、渴愛を満たすことは幸せに繋がらないというのです。では本質は何かと言えば、渴愛を無くすことである。ブツダは悲しさを感じ続けるという行為が苦しみを打ち消すと考える。ブツダは、渴愛することなく現実があるがままに受入れられるように心を鍛錬する一連の瞑想術を開発したのです。それによって、私が何を経験したいかではなく、私が今何を経験しているのかに注目できるようにする。つまり、何かを求めるといふ心ではなく、

私は今どういう状態にいるのかということ客観的に見ると訓練をせよと言うことです。そして渴愛を避けやすくするような倫理的規範を設定した。それが戒です。殺すとか、盗むな、という戒です。その目的は自分の心に渴愛が生まれないようにするためということです。これはけつして神様との契約でもないし、何か定められた絶対的な高次な教えでもありません。これは我々が渴愛を起ささない為にはどうすればよいかという極めて実利的な側面から考えられた生活規範であります。そして渴愛が完全に消えた状態を涅槃という。涅槃に達しても不快さや痛みを経験は続くが、これによって苦悩に陥ることはなく、こういういった渴愛を消して涅槃に至る法則をダルマつまり法という。苦しみは渴愛から生じるという法則はDhammaと同じレベルで常にどこでも正しいのです。それを自分たちの活動を支える指針としている人達を仏教徒と言うわけです。しかし実際には、多くの仏教徒は涅槃を目指すのではなく現世での利益を目標とした。さらに大乘仏教になると、種々の仏や菩薩が現れ、涅槃に入るだけでなく、現世での様々な利益を願うようになっていきました。次もハラリさんらしい衝撃的な内容です。こういった自然法則宗教の現代における信仰こそが、自由主義、共産主義、資本主義、国民主義、ナチズム、人間至上主義だということです。人間至上主義というのは、人間は奪うことのできない特定の権利を生まれながらに持っているということですが。これらは自らをイデオロギーと呼ぶのですが、その実体は宗教です。それは紛れもなく、超人間的な秩序の信奉に基づく人間の規範や価値観になっています。その意味で、近代は強烈な宗教的情熱が前例の無い宣教活動として、つまりはイデオロギーを我々にすり込んでいく時代です。そして史上最も残酷な宗教戦争が国家間戦争ということになるのです。現代はこういつた時代であります。仏教は超人間的秩序がブツダによって発見されたと信じるのに対し、共産主義者はそれがマルクス、エンゲルス、レーニンによって発見されたと信じています。しかもそれはプロレタリアートの勝利という予言まで含まれていると。宗教の予言だと言っているんです

ね。そして、信者達は命を懸けてその福音を広める。これがいわゆるイデオロギーの宣教活動だと言われるのです。最後に、今の世にはこの人間至上主義宗教が流行っているとあります。一番が、自由主義の人間至上主義。二番が、社会主義的人間至上主義。三番が、進化論的人間至上主義です。一番の自由主義は、個人の自由をもっとも神聖なものとする。これは人権尊重主義であります。彼らは拷問や死刑に反対し人間の尊厳を守ろうとする。これは形を変えた一神教です。各個人には自由で永遠不変の魂があるとするキリスト教の信念に基づいているのです。規律の基本は個人の尊厳の自由の保持であり、これを我々は守らねばならず、必ずこれに沿って生きねばならない鉄則であるというのが自由主義です。二番目の、社会主義はホモサピエンスという種全体を神聖なものと感じることであります。種の神聖性がこの宗教の一番大本にあるわけですね。個々の人間にとつての最大の自由ではなく、全人類の平等を求めるのです。不平等を人間の尊厳に対する最大の冒瀆だと考えるのです。これも一神教を土台としています。あらゆる魂は神の前に平等であるというのがその原則であります。その基本は平等ということで、これがいわゆる社会主義や共産主義という宗教の基本理念になっているのであるということです。そして三番目は、進化的人間至上主義。これは怖いですよ。ナチスがその代表であります。人間は変化しやすく、進化することもあれば、退化することもある。人種差別を基本路線とし、規律によつて退化を防ぎ、超人への進化を促す。アーリア人種の隔離保護。これがナチスですね。ナチスは絶滅すべき弱者を救う自由主義と共産主義を敵対視したのです。なぜヒトラーがあれほどソ連を嫌ったのか。ソ連は共産主義で、全ての人間が同じ形で平等に暮らすべきだと主張する。それをヒトラーは絶対に許せなかつたのです。なぜならば、人間は平等じゃないからです。人間は劣つた人間と、進化すべき優れた人間が最初から決まっているのであるから、進化した人間の後押しをして、劣つた人間は絶滅させるのだというのがこの進化的考えですから、当然共産主義は敵になるわけですね。そしてハラリさんは、

遺伝子工学による新たな進化論的人間至上主義が今展開していると予言します。先日中国でこれが出ましたね。禁止したってダメでしょう。すぐに全世界に広まり、我々は、遺伝子工学によって生まれた優れた人間と、遺伝子操作を受けていない劣悪な人間にこれから二分化されていくことは明白であります。

以上が、『サピエンス全史』の大枠です。非常に理屈としては納得ができます。このように今のような形で宗教というものが存在し、我々が宗教だと思っていない形で実は宗教が世に充滿しているのだと。日本は宗教的ではない国だとか、日本人には宗教心がないなどと言いますが、とんでもないことで、本来の既成教団が受け持っていた宗教心を別のものが受け持っているのですね。例えば、「命の尊厳」というような宗教的キャッチフレーズがものすごく流行っていますね。仏教の立場から言えば、これは愚かな考えでありまして、命に尊厳などございません。この世は一切皆苦です。生きていくことは全て苦だと言うのです。自分はなぜここにいるのかということがわからないままに放り出されて生きている人間が、それでもどうしたら幸せになるのかと思索しているのが仏教なのです。人間が生まれながらにして立派な命をもらって生きていますといたら、もう仏教は成り立たないことになります。ところがいつの間にもやら、命の尊厳と言うと、それだけで素晴らしい事を言っているような錯覚に陥って、あちこちで「命の尊厳」の大合唱です。これが先ほど言いました自由主義的人間至上主義の一要素でありまして、だれかが尊厳を与えてくれたはずだという思想がありますから、これは一神教の考え方ですね。それが知らない間に我々の心に染み渡って、宗教的な一種の洗脳をしているのです。宗教と無縁のような顔をして生きている人であっても、もうすっかり染まっているのだということになります。今日の話は、歴史的に宗教がどう起こってきたかをメインテーマにしようとしているのではなく、テーマは「我々にとってなぜ宗教が必要なのか」という話です。今までの話の中にその答えはないのです。理は通っているのですが。今までの私の話を聞いて、「だから私にはや

「つぱり宗教がなくては生きられない」と思った人は一人もいないと思います。むしろ逆かも知れませんね。こんなことから離れたいと。このハラリさんの説は、学問としては最高級であつて、間違いなく真実なのですが、一番大事なことは、宗教の当事者ではないということです。この人は何らかの宗教で生きていこうという意思もないし、宗教で生きていく必要が今のところないようですね。

戸塚洋二氏『がんと闘った科学者の記録』にみる宗教的歩み

今日はもう一つ別の話をしようと思います。宗教とは無縁の方で、むしろ宗教なんか大嫌いというような人の話であります。ここに本を持って参りました。『がんと闘った科学者の記録』（文春文庫）という本です。作者は戸塚洋二先生であります。少しこの先生のことを紹介します。この先生は素粒子物理学者で、ノーベル賞が確実であつた人です。書名から分かるとおり、この先生はがんで亡くなりました。おそらくもう一年長生きされたら、ノーベル物理学賞受賞であつたと思われます。この先生はご自身の先生がカミオカンデを作られた小柴先生で、ニュートリノという捕まえにくい粒子を世界で初めて観測なさつた先生です。その愛弟子が戸塚先生で、そのまた愛弟子が梶田先生という関係です。戸塚先生は、小柴先生がお作りになつたカミオカンデという巨大な実験施設をさらに発展させました。カミオカンデというのは神岡銅山の下にあるからカミオカです。最後のンデとはNDEの略で、Nucleon Decay Experiment、つまり核破壊実験というようです。そのカミオカンデをさらに発展させたスーパーカミオカンデというものを戸塚先生はお作りになつて、ニュートリノという世界で最も捕まえにくい粒子を捕まえました。その粒子というものが今までの物理法則では予測できない動きをするということを見出し、それによつて物理法則の本が書き換えられてしまうという壮大なことをなさつた方なのですが、そのスーパーカミオカンデの業

績がいよいよノーベル賞という前にがんになられたのです。したがってこの先生は、宗教に全く触れない状態で、そして人生の絶頂期に達したときに、がんになつていっているのです。そこから今日のお話の主題です。この方が一体何を求め、何を考えながら亡くなつていったのかという話です。普通ならば、横にいる人達がそれを書き留めるのですが、この先生がすごいところは、自分でブログを開いたのです。ブログに自分が死んでいくまでの様子を全部書き込んでいます。この本はそのブログの書籍化です。なぜ私が取り上げると言いますと、先生は私が朝日新聞に連載していた「日々是修行」という記事を読んでくださいまして、私に連絡をしてくださいました。亡くなる少し前ですね。仏教とはどのようなものですかと聞かれたのです。自分の命が縮んで行く中です。それで私は東京まで行きまして、この戸塚先生とお会いしました。もう実務を離れ、スーパーカミオカンデの仕事から離れ、療養生活をなさつていらつしやいましたが、大変明るく、ほんとに立派な人格者でありました。その先生と二時間余りにわたり仏教とは何かを話しました。それまでは仏教とは何の関係もなく素粒子物理をやっていた人が、仏教をです。今日の話はここが大事なのであります。今日の話は、なぜ宗教が必要なのかというタイトルですが、それが誰に必要なかが重要なのです。この講演のタイトルにはその目的語がないですね。例えばこれが「人類にとって」となりますと、先ほどのハラリさんのような説明になります。人類ではなく、「私に」と書くとは全然違いますね。「なぜ宗教は私にとって必要なのか」と書きますと、問題は途端にその人の一生へと集束していくのです。そこには、農耕民族になりましたとか、そのような人類の歴史は何の意味もないのです。今死にゆく私を救つてくれるものがあるのかないのか。その一点がその人の問題点なのです。だから、このタイトルをどのように持つていくかによつて、話は全然答えが違つてくるわけです。今日言いたいのは、これほど違う答えが出るものだとということなのです。では『がんと闘つた科学者の記録』の一部を紹介します。この本の中に、有り難いことに私のことも出てき

ます。私は先生が亡くなったときに、辛くて辛くてしょうがなかったですけど、この先生が自分の死というものを見つめたときの思いが残っておりますので、いくつか紹介いたします。

一つは、亡くなる少し前のものですね。(以下、引用は講演に基づく。へゝは講演者コメント)

われわれは日常の生活を送る際、自分の人生に限りがある、などと言うことを考えることはめったにありません。稀にですが、布団の中に入って眠りに就く前、突如、

▼自分の命が消滅した後でも世界は何事もなく進んでいく、

▼自分が存在したことは、この時間とともに進む世界で何の痕跡も残さずに消えていく、

▼自分が消滅した後の世界を垣間見ることは絶対に出来ない、

ということに気づき、慄然とすることがあります。

個体の死が恐ろしいのは、生物学的な生存本能があるからである、といくら割り切っても、死が恐ろしいことに変わりありません。

お前の命は、誤差は大きいが平均値をとると後一・五年くらいか、と言われたとき、最初はそんなもんかとあまり実感が湧きません。しかし、布団の中に入って眠りに就く前、突如その恐ろしさが身にしみてきて、思わず起き上がる場合があります。右に挙げたことが大きな理由です。

右の理由を卑近な言葉で置き換えると「俺の葬式を見ることは絶対出来ないんだ」ということになりませんか。こんなバカなことを皆さんお考えにならないでしょう。しかし、残りの人生が一、二年になると、このような

変な思いが浮かんできます。

残りの短い人生をいかに充実して生きるか考えよ、とアドバイスを受けることがあります。このような難しいことは考えても意味のないことだ、という諦めの境地に達しました。私のような凡人は、人生が終わるという恐ろしさを考えないように、気を紛らわして時間を送っていくことしかできません。

死までの時間を過ごさなければなりません。どんな方法があるのでしょうか。

▼現役なら、仕事に気を紛らわす手段になる。

▼引退したら、何でもいいから、気を紛らわすことを見つけて時間をつぶすことだ。

▼死が近づいたとき、むしろ苦痛にさいなまれて（短時間で勘弁してほしい）、もう早く死が来てほしいという状態になったほうが、むしろ楽だ。看取るほうは大変だろうが。

▼自殺は考えない。簡単に負けるものいやだ。

お恥ずかしいですが、とても有意義な人生を最後に送ることはかけ離れています。

しかし、何とか死の恐れを克服する、いつてみれば諦めの境地はないのだろうか。そのような境地を無難見つけてはいませんが、右の理由を超越する諦めの考えが一つ二つ思い浮かぶことがあります。

▼幸い子どもたちが立派に成長した。親からもらった遺伝子の一部を次の世代に引き継ぐことが出来た。

「時間とともに進む世界でほんの少しだが痕跡を残して消える」ことになるが、種の保存にささやかな貢献をすることが出来た。

▼もつとニヒルになることもある。私にとって、早に死といっても、健常者と比べて十年から二十年の違い

ではないか。みなと一緒だ、恐れるほどのことはない。

▼さらにニヒル。宇宙や万物は、何も無いところから生成し、そして、いずれは消滅・死を迎える。遠い未来の話だが、「自分の命が消滅した後でも世界は何事もなく進んでいく」が、決してそれが永遠に続くことはない。いずれは万物も死に絶えるのだから、恐れることはない。

後の二つは、ちょっと情けない考えですが、一蓮托生の哲学によって気が休まります。

宗教はどうでしょうか。私は、

▼絶対的超越者の存在を信じない。マザー・テレサが神の子の実在を信じていなかったという記事「77及び102頁」を読んでちょっと安心した記憶がある。へこれはマザーテレサが亡くなる直前に、私は神を信じていなかったといって死んでいった。それを知った戸塚先生がそれじゃマザーテレサも私と同じように絶対者を信じない立場で生き抜いた人だったんだなと言うことを共感したという話なんですわ。へ

▼生前の世界、死後の世界の実在は信じない。輪廻転生も信じない。なぜならば、宇宙は生まれ死んで行くのは科学的事実だから、無限の過去から無限の未来へ続く状態など存在し得ない。

▼佐々木閑先生からお教えたいただいた古代仏教の修行には興味がある「171頁」。その修行は大変厳しく、また集団で行うことが基本ということで、へこれはサンガのことですね。へ「苦」を解脱するため修行をしたと思うときには、体力を失い修行は無理な状態になっている。へ無駄じゃないかと言っているんですけどね。へ

▼個人的に瞑想をしても、諦めの境地に達するだけだ。

ニヒルで取り付くしまがありません。

結局、充実した人生を送るための糧はまだ見つかっていません。

(2・10 戸塚)

と、これがその日の感想なのです。次に紹介するのは、もう少し死が近づいた時のものです。ブログを書いていきますと、同じ癌患者の方から応答が来るらしいのです。その中で、大腸癌患者の若い人でまだ子どもが小さい人から四月二十六日にこんなコメントが来たというのです。

「私は大腸癌が腹膜転移したステージ4の大腸癌患者で、これからの事を考えると明るい材料は何一つありません。Few More Monthsさんは、A Few More Monthsさんというのは、戸塚先生が自分の本名を隠しハンドルネームとしてつかっている名前です。戸塚先生は自分が戸塚洋二だと最後まで明かさずにブログを書いておられました。大腸癌から肺転移、骨転移、脳転移となり、抗癌剤を使い切った状態で、結構厳しい状態とご自身をいわれていますね。しかし、まるで自分という存在を超越し、冷静に、これまでご自身が行ってきた研究の将来像を慮っておられます。私は正直、今後の事も恐れるばかりで、中々考えられません。その前向きな考え、行動は、一体どういう心の持ち方をしたらできるのか、ご教示頂けませんでしょうか。失礼を承知の上、お頼み申し上げます」とのコメントをいただきました「ブログのコメント欄に寄せられた」。

ステージ4大腸癌患者さん。Aさんと呼ばせてください。Aさん、毎日さぞかしおつらいことと存じます。同じ境遇として共感致します。四月二十六日に右のようなコメントをわがブログにいただき、精神状態がいつ崩壊するかを心配している者としてとても答える資格はないな、と悩んでいました。

しかし、自分の精神状態を記録するのも一興かなと思ひ、まったく個人的な精神の葛藤を少しずつ書くのいい機会を頂いたと考えるようになりました。

それでは、今日の分をはじめます。

私ももちろん「今後の事も恐れるばかり」の時期があり、今も無論あります。この「怖れ」に自分なりの対処をすることに必死になって努力しています。

まず、根底にある考えは、「恥ずかしい死に方をしたくない」が出发点でした。弱い人間ですからやることは簡単です（難しいですが）。

①「怖れ」の考えを徹底的に避ける。ちよつとでも恐れが浮かんだら他の考えに強制的に変える。

②「自己の死」の考えが浮かんだら他の考えに強制的に変える。死は自分だけに来るのではない。すべての人間にくる。年齢にもよるが、死の訪れは、高々十〜二十年の差だ。その間の世界はどうしても生きて見なければならぬ価値があるとは思わない。

③自分が「がん」になった理由はすべて自分にある（私の場合は）。自分以外は決して恨まない。

④まだできなくて困っていることが一つ。妻につい愚痴を言ってしまう、彼女を精神的に追い詰めてしまう。これを克服しなければ。

以上です。あとは、各項目について具体的に何をするか、です。実は私にとってこれらの具体的行動は修行の一種です。（ちよつと非科学的臭いがしますが）。

人によってやるべきことはまったく違ふと思ひます。後日から細々と書きたいのは、私の個人的アクション

です。ご参考になるかどうか。

(戸塚)

先ほどのステージ4の患者さんに再び対応しています。五月二十七日ですから、もう亡くなる一ヶ月少し前です。

ステージ4の大腸癌患者のAさん。ご機嫌いかがですか。

今日は、時々訪問するブログに感動したので、ここに引用したいと思います。

「よこはま若者サポートステーションへようこそ」がそのサイトです。

この組織のプロフィールを見ると、「15歳〜34歳までの就労支援施設です。個別相談を中心としながら、一人ひとりの『働くまでの道のり』と一緒に考えます。多くの機関や団体（人）との関わりの中で皆さんが社会の中で自分らしく生きていけるように私たちは皆さんの活動を応援しています」とあります。がん患者とはまったく関係がありません。

五月十日の記述です。多分若いスタッフが、正岡子規のこの一言に感動したのでしょう。僭越な感想ですが、文豪が、まさに私が努力して到達したいと思っっている人生の終末を至言で表してくれています。

ブログのその部分をコピーします。

さてさて、今日は正岡子規の言葉を紹介しようと思ひ、ブログを書きました。

正岡子規、ご存知ですか？

明治時代の文学者ですが、病気がちなこともあり、書いている文章も多くが病との闘いを通したものが多いのですが、心に残った文章がありましたのでご紹介させていただきます。

とても有名な言葉のようですが、私は知りませんでした。彼の『病牀六尺』からの一節です。

「悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた」

更なるコメントは必要ないと思います。

と。これで終わりです。一番最後二〇〇八年七月二日には「入院です」と書き、そしてその次が、七月十五日の息子さんがお書きになったブログであります。

few more months の家族のものです。

皆さんすでにご存じのとおり、父は七月十日に亡くなりました。

最後まで見守つた家族としては、その壮絶な経過を記したいところですが、

本人はきつと嫌がるでしょう。

ただ、がんと正面から向き合い最後まで戦い抜いたということは言つて良いと思います。

二〇〇七年八月から始つたこのブログは、結局 *fourth-three months* で閉じることとなりました。

これまで皆さんに読んでいただき（時として更新することがプレッシャーともなつていたようですが……）、少しでも皆さんのお役に立てたのであれば、本人も喜んでいるものと思います。

これまでお読みいただき、誠にありがとうございました。

本人に代わりここで御礼申し上げます。

というので終わっておりまして、最後に戸塚先生の写真が載っているのですね。

先ほどのハリリさんの宗教の説明とまったく対局の話でありまして、戸塚先生は宗教がどうか、人類がどうか、まったく関係ないのです。これはただ、自分が死ぬということを目前に見たときに、その死に耐えながら、この人間の弱い精神を保ちながら最後まで恥ずかしくなく、正気を保ち、冷静な姿で生きていきたいと、科学者としての矜持を守りたいということがあります。そういう生き方を目指した人が、最終的になにを依りどころにするのか、という問題です。「なぜ宗教が我々に必要なのか」という問いに対するひとつの答えを示していると思うのです。

仏伝に学ぶ宗教の必要性

それで話は仏教に移ります。ハリリさんのように歴史の中で大きく見て宗教が必要なかという話が、ある日突然に、そんなことはどうでもいい。今死にゆく私をどうしてくれるのだと、気持ちが変わった時、その時に宗教の本来の姿がその人に見えてくるのだと、私は思うのです。仏教という宗教は、誰からも救ってもらえないはずの私が無によって救われるのかということ深く考えた宗教であります。その話が仏伝の中に残っているので、それを二つご紹介致します。お釈迦様の伝記の中のエピソードでもっとも優れたものです。

一つは皆さんもご存知の「四門出遊しもんしゅつゆう」です。

「私は次第に衰え、年を取り死ぬ」という確信、しかしそれは他人事だという油断です。これは今のんきに暮らしている私たちのことです。私たちは皆、自分が死ぬと知っています。しかも、その死は決して右肩上がりのまま訪れる死ではなく、右肩下がりの結果としての死です。つまり年を取って、病気になる、衰え、様々な

自由を奪われた末の死であります。モデル化された自分の将来の姿です。だから何とかそうなりませんようにと、ぼつくり寺にお参りしますね。しかし、そのような願いは叶わないですよ。ほぼ間違ひなくみんな年を取ってお亡くなりになる。と、このように言っても、私たちは全然顔色が変わらないですね。それは何故か。他人事で見ているからです。我々は他人事で見ると本能的にプログラムされているのです。他人事で見るとはけしからん、もつと自分のこととして捉えようというのはとんでもない話でありまして、わが身のこととして捉えたら何もできませんよ。家から一歩も出られなくなつて、もう生きて希望がなくなりますよ。きちんと私たちの脳はそれを守ってくれまして、自分のことだと思わないように思わせてくれるのですね。「お気の毒に」というのは、他人のことだと思つているのですね、自分のことなのに。一番大事で深刻な問題は隠しておいて、一番つまらなくて、そして自分の快感、欲望の充足にかなうことが先に頭に浮かぶように、私たちの脳はできております。例えば、家族から電話がかかつてきて、「お父さん一週間後の土日には有馬温泉に行きましょう」と誘われる。そうするとお父さんは喜ぶわけですね。一週間後に有馬温泉に入つて美味しいものを食べることを想像するからです。しかし、それは、人生全体から見れば、寿命が一週間縮んでいることでもありません。温泉につかつている私は、今の私よりも寿命が一週間縮んでいるわけですよ。でも「そんな寿命が縮むような話はやめてくれ」とは言わないですね。「有馬いいなあ」と思うのは脳の働きのお陰であります。こうして私たちは毎日、脳気な顔をして楽しいことがいっぱいあるようなふりをして生きています。そうしている間にも時計の針は刻々と老と病と死とを刻んでいくということです。戸塚先生の例を出しますと、戸塚先生がノーベル賞の仕事をし、ニュートリノの研究をし、世界的な発表をなさつて居る時に、自分が死んでいくことなど思ひもしなかつたのです。真理の発見という世の中でもつとも素晴らしいことに全精力を懸けて突進しているのですから、その自分が自分自身の死など考える

時間はないのです。戸塚先生は宗教など何の興味もない無宗教者でした。物理学で生きているのだと。ところが、その人生がある機会で、どのような縁があるか分かりませんが、何らかの縁が来たときに、老と病と死に直面し、自分のことだと思ふ瞬間を持つわけです。戸塚先生の場合だと、癌による死期を宣告された時であります。誰にでも、生きていく本質は苦しみであって、今まで楽しみだなどと考えていたものは、この世の泡ぶくに過ぎないのだと気づく機会は、様々な時に起こります。一番分かりやすい例は年を取っていくことです。年とともに楽しみよりも、人生の残りが少なくなっていく苦しみの方に比重が増していきます。また、大きな病気を抱え、今まで健康で自由であった人がその自由を奪われた時、わが身のこととしてその病気を引き受ける事になります。また例えば、大災害という外的な要因でそれらが失われる場合もあります。「幸せとは何であるか」と聞くと典型的な答えでは、良い大学に入って、良い会社に入って、良い給料もらって、ステキな彼女をもらって、子どもが二人で、良い車を買って、庭付き一戸建てで、老後も幸せでと、これが幸せです。もう少し欲な人もいるかも知れませんが大体そのようなところです。それでその人が幸せだと思っているところに、ある日突然津波が来るわけです。家や車が流され、家族が目の前で死んでいくのです。その人はもう一度幸せを願いますが、その幸せについてのよう思うのか。前の幸せというものが幸せだったからといって、同じ幸せをもう一度作ろうとするだろうか。もう一度家を建てて、もう一度車を買うのか。そうすれば昔の幸せが戻ってくるなどは、誰も思わないですよ。それはなぜか。幸せの重さと、本当の苦しみの重さの差に気がついてしまうからです。その人は今度は別の生き方を探さようになるわけです。老・病・死というものを他人事ではなく、わが身のこととして引き受けたその時から、その人は新しい生き方でなければ生きられなくなってくるのです。それまでの幸せの基準が全部崩れていくわけですから、以前の基準に頼って生きていく事ができないと思った人は、別の基準を探すしかないわけです。四門出遊と

はそのような話ですね。お釈迦さまが生まれたとき占い師が赤ちゃんの手相を見ました。彼は、「これはすごい人ですよ」と言った。「将来はすごい王様になりますよ」と。「ただし、ひよつとしたらこの世が嫌だと思って出家してお坊さんになってしまいかも知れない。その時にはすごい宗教家に、ブツダになりますよ」と言うわけです。父王はそれを聞いてビビるわけですね。宗教家になんかなられたら困ると。王家を継いでもらわれないといけない皇太子が出家してお坊さんになるとはなにごとか。絶対にそのようなことがないように、絶対に坊さんになりたくないようにするにはどうしたらよいかと家来に相談するのです。家来は、「生きていることが本当は辛いことだと分かってしまうと人は出家するのですから、分かせなければいけません」と言います。「この世が幸せに満ちていると思えば良いのです」と。「身の周りに幸せそうな人ばかり置けば良いのです」と。そういうわけでお釈迦様は若い女性に囲まれて育ったのだそうです。若い女性ばかり置くと置くというのは、人間が苦しんでいる状態、つまり年を取ったり、病気になるったり、死んだ人を見せないように育てたわけです。そのお釈迦様が大きくなったとき、たまたま運命のいたずらで、四門出遊という、城の東西南北の四つの門から外へ社会見学に出たのです。いつてみればピクニックですけれども。外に出たら、嫌でも周りは辛い世界です。その中で、老人を見る、病人を見る、葬式を見る。その時の言葉が大事なのです。お釈迦さまはお伴の者にこう言うのですね。老人を見て、「あの変な人間は何だ。腰が曲がって、シワがあり、ヨタヨタ歩いている。私は今まであのような者を見たことがない。人はみんな綺麗なものだと思っていたが、なんであんなに腰が曲がってクシヤクシヤなのだ」と。するとお伴の者が、「あれは老人でございませう」と言うわけですね。「どうなったら老人になるのか」「どうもしなくても一年ずつ自然とあのようにになります」。「あのものは一体どのような悪いことをし、罰としてあのようなになったのか」「何も悪いことなどしていません、普通の人間です」。そうすると次にお釈迦さまが一言発するのです。ここが釈迦の一

生の分かれ目です。「私もあのようになるのか」と尋ねたのです。お伴が「当たり前です」と答えると、お釈迦さまはガーンとショックを受けて、お城に戻ってしまいます。父王が「あれは方向が悪かったのだ別の門ならいいだろう」ということで別の門から出ると、今度は病人には会う、葬式には会うということで、お釈迦さまはトリプルパンチで生きる望みを失うわけです。カピラ城がもし三つの門しかなかったらお釈迦さまは救われなかったわけですね。でももう一つ門があったのです。そのもう一つの門から出たところに修行者がいた。宗教家がいたわけです。仏教以前の宗教家ですから、髪の毛ボサボサのいわゆるインドでサドゥーと呼ばれる人達の姿だっただろうと思われまます。「あれは何だ」。「あれは出家修行者であります。出家修行者というのは、人生の本当の喜び、本当の安楽を求めて探し回っている者たちであります」とお伴は答えるのですね。しかしお釈迦様にはわかには信じないわけです。「なぜあれが安楽なのか。格好はボロボロじゃないか。何一つ良い物を持っていないし、足も裸足ではないか。貧乏なのに安楽なのか」。「先日来、王子様は老・病・死と出会いました。あなたは王子なのにめっちゃ顔が暗いではないですか。あちらの修行者をご覧ください。何も持っていないとあなたは馬鹿にしますけれども、あの人の綺麗な目と、はつらつとした生き方を見てください。ここに本当の幸せというものがどこにあるのかとすることが出ているではないですか。あなたが思っていた幸せの基準は間違いの基準で、それは老と病と死の前では役に立たない幸せなのであります。あの修行者は、その老・病・死を自分で引き受けながら、自分のこととして自覚したその人がそれを乗り越えて、本当の幸せをつかもうとしてしているのです。その人達にとつて、あなたが幸せの規準と思っている豪華な衣装やお金などは役に立たないと分かっているから、始めから捨てているのです。どうしますか」。私がかかり脚色をしましたが、二人の対話の要点はこういうことです。そこまで言われれば、お釈迦様も納得します。老と病と死とは、今まで他人事だと思っていたけれども、今の私がそれを引き受けているのであり、

その苦しみは自分の苦しみだと気づいてしまったのです。今までの幸せの規準は偽物であると一旦気がつくともうそれに意味はなくなる。大災害に遭って全てを失った人の多くが、もう一度その生活を復元することで幸せになるとは思いわないのと同じことで、全く新しい生き方を求めるようになるのです。本当の幸せをつかみ直さなければならぬと思うわけであります。そう思ったお釈迦さまは、今まで通りの、若い女の人に囲まれて、毎日ダンスを見て楽しむというのを、いくら続けても、もう幸せのかけらも感じません。むしろそれは逆に絶望への道です。そしてその数日後に、お釈迦さまは出家して森の中に入り、先ほどの修行者と同じ道をたどっていくわけです。このように考えますと、「宗教はなぜ必要なのか」の答えは、私たちが死ぬからであると言えます。逆の言い方をすれば、生きているからです。生きていることの本質は苦であるからです。このように宗教を捉えたとき、宗教が広まって嬉しいとか、自分の信じていることを他の人が信じてくれるから嬉しいとか、そのようなことを思うことはないのです。宗教の本質は今いる自分が救われるか救われないかの、その一点に尽きるわけですから。自分を救ってくれる宗教があればそれで十分なはずなのです。ところがいつの間にか、一人ひとりを救うはずの宗教という組織が、「組織として広がること」に喜びを持つようになっていくわけです。そのような喜びを持つ人は苦しんでいない人ですね。苦しんでいない人が自分の生きがいとして組織拡大を目指すわけです。それは健康な人が考える世俗の喜びです。そのようなものは宗教の本質ではありません。組織拡大を目指していた人が、あなたの命はあと三ヶ月だと言われたとき、組織拡大に自分の人生を懸けてはいただけないと思うはずです。その三ヶ月で死んでいく自分をどうやって助けるかという方に向かうでしょう。その人はその時に、初めて宗教で生きる人にならなくていくのです。

仏教というのは、初めからお釈迦様自身のそのような体験に基づいてできた宗教ですから、一人一人を救う宗教

でいいのだとおっしゃいました。それを表すのが二番目の梵天勧請のエピソードです。お釈迦様は生まれて七歩歩き、青年期に四門出遊で出家して、さとりをひらいてブツダになるまでの間、他人のために何かをしたということ一つも出てきません。全然慈悲がないのです。ここまでのお釈迦様は利己主義の権化だったのです。自分のことしか考えていなかったのです。これは当たり前です。自分の苦しみを自ら引き受けているからです。他人のために宗教をつくろうなどという余裕はないのです。四門出遊の出来事で戸塚先生と同じ状態になったわけですね。今私が生きていることはすべて苦しみの上に立っているのだと思った人が、他人のために何かしましたよなどという余裕があるわけもなく、まず何をおいても自分の苦しみをなんとかしたいと願うのが当たり前です。喩えて言いますと、若くして不治の病にかかり、その病気を宣告され、あなたはやがて死ぬでしょうと言われた人が、自分の苦しみを何とか取り除きたいと願って、その人自身が医学研究者になったわけです。そして病気を治す道を探し始めるのですが、これが修行ですね。そして菩提樹の下でさとりをひらく、つまりは薬ができたのです。それまでの間は自分のことで一生懸命ですね。その出来上がった薬をお釈迦様は菩提樹の下で飲み、病が治ったのです。それからどうするのか。お釈迦様はこう考えました。治ったからもうこれでいいのだと。病は治り、もう何の憂いもない。これから歳をとって病気になるって死んでいくという運命は変わらないけれども、歳をとっても病気になるって死んでいくということが分かっていても、それが苦しみにはならなくなったと言うことです。苦しまなくなったのだから、後は自然に寿命が来るまでの間は生きて、人知れずに死んでいこうと思っただけです。ごく自然な流れだと思います。するとそこで空から神様が降りてくるわけです。空の上から梵天という神様がすーっと降りてくるわけです。梵天というのは当時のインドで最高神で、これ以上の神はいません。最高の神様が降りてきて、お釈迦様の前で手を合せてこう言うわけです。「あなたが今お見つけになった幸せになる道、言ってみれば難病に効く薬、

その薬を今あなたは飲んで健康になった。そしてそのまま死んでいこうと思っているでしょう」と。お釈迦さまは、「そうです」とお答えになる。「それでは困る。その薬を欲しがっている人、治る人は世の中にいっぱいいるのだから、その薬をみんなに分け与えるためにあなたは立ち上がって薬の配布をしてください」と。これは布教のことですね。布教に立ち上がってくれと梵天は頼むわけです。このときにお釈迦さまはなんと答えたかと言うと、「嫌だ」と。大事な一言ですね。「嫌だ」と。その理由は、「私のこの薬は、私のような生きることが苦しみであると考え、そのような病気にかかっている人には必ず効く薬である。しかしながら世の中を見ると、老・病・死を我が身のこととして引き受けていない人がほとんどである。そのような人のところへこの薬が良いですよと言っても、余計なお世話で帰ってくれと言われるでしょう。本当にこの薬を必要としている人はわずかしかおらず、立ち上がっても無駄な仕事で終わってしまうだろう。そんなことはやりたくない」と、お釈迦さまは断るわけですね。すると梵天の答えもいいですね。「その通り」と言うのです。「あなたの仕事の大半は無駄になるでしょう。しかしそれでいいのです。あなたと同じ病気で苦しんでいる人は必ず治るのだから、それが全体のわずか少数でも、とにかくあなたの薬で本当の幸せを手に入れて老・病・死の苦しみから救われる人がいるというのだから、その人の為だけでいいから立ち上がってください」と説得するわけですね。それをお釈迦さまは聞き、残りの四十五年間、布教活動に専念されます。ですから前半の三十五年は利己主義で、後半の四十五年は慈悲の人と言えます。ここに仏教という宗教の他の一神教の宗教とは違う側面があります。先ほどのハリタさんの説明によりますと、一神教的世界観というのは、全ての人間を一つにまとめあげ、同じ考えで同じ行動をさせるということで役に立つわけですから、一神教世界観の本質は、広めねばならないということであり、ところが、今のお釈迦様の梵天勧請のエピソードは、仏教は全ての人に広めなくていいと最初から言っているのです。仏教はどのような人に役に立つのか。それ

は生きる苦しみに悶えている人の病気を治すのに役立つのです。この梵天勸請には、極めて重要な仏教の特質というのが現れてくるのであります。

まとめ

宗教はなぜ必要なのかと問われるとき、どんな宗教がどんな人に必要なのかと言うことを我々は問わねばならないと思います。仏教という宗教は、生きる苦しみに悶えている人、あるいは生きる苦しみに絶望の底にいる人には必ず必要である。しかし逆に言うと、今生きている自分が幸せであるという錯覚の中で満足している人達にとっては、その段階では必要ないということですね。この質問は状況によって全て答えが違うのです。それで最終的に、宗教が何故必要なのかという問いに対して答えを一言でと言われれば、宗教の真の必要性は宗教を必要とする人にかかからない、というのが私の答えであります。宗教を必要とする人にとっては絶対的に必要であります。宗教によって自分の死までの人生が全て支えられていくこととなります。これが宗教がこの世に存在しなければならぬ必要性であります。人間というのは大変な恐ろしい宿命を背負った生き物であります。他の生き物のように、自分の先行きのことなど考えない動物であるならば、その日その日の暮らして幸せなのですが、人間だけが自分が歳をとって病気になるって死ぬということをし、そうやっていないのを知ることができるようになりました。私たちは自分で知ってしまった自分の宿命を後追いつながら生きる生命体であります。その中で右肩下がりの辛い人生の中で自分を支えながら生きていくためには、どうしても宗教という杖がなければ生きていけないのだと言うことでもあります。そう思う人には必要です。まだ思っていない人には必要ではないかもしれませんが、思った瞬間から何が何でもその人の支えとして必要になるということであります。戸塚先生は特定の宗教には入りませんが、先ほ

ど紹介しましたように、いろんなことを考えながら自分の死までの人生を何とか全うしようとされました。その姿はまさに宗教に生きる人間の姿であると思うのであります。

以上であります。ありがとうございました。